



コラム 花と虫と子どもと未来

6 森の案内人が森で見つけた園庭のイメージ

前回に続き、森の案内人が出会ってきた環境を、園庭の生態系と絡めて分かち合いたいと思います。

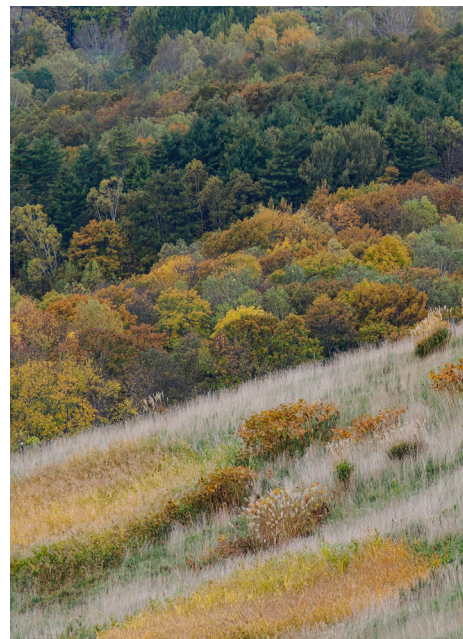
八ヶ岳南麓の標高 1,300m の森です。「木」と聞くと、ついついスッと立っている姿を思い浮かべますが、つる性木本（つる性の木）は基本的には自立することができません。自立する木に巻きついたり、その木を支えにしたりして伸びてゆきます。生態系が豊かな森には、つる性の木や草が必ずと言っていいほどあります。つる性の木が作る茂みは、鳥や虫などの生き物にとって格好の隠れ場所であり、繁殖場所にもなるからです。狭い園庭でも、壁やフェンスなどを利用してつる性の木を活かすことができます。



八ヶ岳南麓の標高 1,200m の渓谷の森の林床です。地面は土が剥き出しになることはなく、常に落ち葉や小枝などの植物遺体で分厚く覆われています。それが基本です。しかし、森を歩いていると、部分的にはこの写真のように、動物遺体もそこに横たわっていることがあります。様々な生き物が生き生きと暮らす場所は、植物はもちろんのこと、動物もそこで死に、分解されてゆく場所だと言えます。園庭では大きな動物遺体が横たわっていることは難しいでしょうが、ミミズや昆虫など小動物の死骸が花壇の中で分解されてゆくこともまた大切なことだと言えます。給食室から出る残渣に動物性のものがあれば、それを堆肥化して花壇に入れることは同じような意味があると言えます。



10月の北海道滝川市の森と草原の様子です。色や形が織りなす風景がとても美しいと感じて撮った写真です。葉の色が変わってゆくのは、木だけではなく、草も同じく葉の色が変わります。秋の終わりに切り戻しの作業をすることは庭の環境の維持や、翌春の植物の芽出しにとって大切な作業です。しかし、色が変化してゆくことや、冬枯れの姿形に出会い感じることも、幼い人にとっては大切な学びです。切り戻しは必ず秋の終わりにする作業と決めずに、春先に行い、冬の間は冬枯れの色や形に出会う大切な機会と考えることも、園庭という学びの場にとっては大切なことと言えるかもしれません。



1の写真は、八ヶ岳南麓の標高1,400mの森です。この辺りは、牧草地から連続する森の斜面で、たくさんのシカがここを通り移動したり、休んだりしています。シカたちは牧草地で草を食べたり、ここで反芻をしたりして、また次の牧草地に向かうのです。森だから、林床が豊かだとは限りません。このように大型の生き物が大地を踏み込む圧が高いと、地面はすっかり土壌が剥き出しの状態になってしまいます。こうなると、まとまった雨による土壌の流出が起きますし、地表近くの木々の根も傷みます。そのような状態が続くと、この場所で生きる生き物の種類が減ってゆきます。

2の写真は北海道の礼文島です。礼文島にはエゾシカやヒグマやキタキツネなどの大中型哺乳類が生息していません。大地が踏まれる圧が低いと、このように自然歩道の脇がすべて豊かなお花畑となり、それが維持されます。気候だけで考えると、礼文島の方がはるかに厳しい冬の寒さや風が吹きますが、それよりも大型の動物が大地を踏み込む圧が生態系に与える影響が大きいと言えます。園庭の花壇をしっかりと奥行きや分厚さがあるように施工し、幼い人が日常的に踏み入ることがないようにすることは、小さくても豊かな生態系を作る際には本当に大切なことです。子どもたちが自分の意思ですべての場所を歩けるようにという願いや意味も理解できますが、今の時代に幼い頃から豊かな生態系と絡み合うようにして生きてゆけることの意味もとても大きいものがあります（都市環境であればあるほどに！）。



いかがでしたか？ 豊かな生態系を再生したいと願い、園庭の絵を描く時には、ぜひ森を歩いてみてください。目に映るすべての風景が、全て園庭の環境づくりのヒントなのです！